

日本語母語話者の動詞の使用 — 工場内で指導する日本人の発話から —

袴 田 麻 里

【要 旨】

地域で生活し、就労する日本語学習者を対象とした日本語学習シラバス作成の参考資料として、製造業のライン作業現場における動詞の辞書形、タ形の使用を明らかにすることを目的として調査を行った。実際の作業現場で作業指導を行っている12人のラインリーダーの発話を分析し、以下の結果を得た。1) テ形、ナイ形、辞書形、タ形は多く使用され、それ以外の活用形の使用は少ない。2) マス形は、非過去での使用がほとんどで、上司や先輩、違う部署の人に当たる人への発話で用いられた。また、アナウンスでは、従属節でもマス形が用いられた。3) 可能形は、「する」の可能形「できる」が大半を占めた。4) 複文において、条件を表すタラ形、バ形はかなり多く使用されている。5) 受身形、使役形、意向形は、ほとんど観察されなかった。どの文型から導入するかを検討する際の材料として、実際の言語使用を知ることが重要である。学習の難易などの他に、実際に使われているという観点からの検討を欠いてはならないと思われる。

1. はじめに

日本国内で就労する外国人は年々増加し労働力として定着しつつある。これら外国人労働者に対する日本語教育は、多様化する日本語教育の一つとして、今後ますます重要性を増すと考えられる。しかし、従来の進学希望者対象の場合とは異なる要素が多く、また、具体的にどの技能・項目を、どのぐらいのレベルまで学習する必要があるのかという点が明瞭でないため、学ぶ側も教える側も試行錯誤しつつ学習を進めているのが現状ではないだろうか。

このような事柄を明らかにするためには、外国人労働者が日常的に接する日本語母語話者の日本語使用状況を調査する必要がある。限られた分野、または空間における、日本語母語話者の実際の日本語使用状況調査は、技術研修(馬場(1998)など)、ビジネス(池田(1996)など)、大学での専門教育(村岡・他(1997)など)などを目的として行われてきている。その多くは語彙調査で、抽出された語をシラバスに組み込むことによって指導効率を上げることが期待されている。しかし、語彙は多種多量であることから、応用性が乏しい恐れがある。

専門や使用環境が異なっても、ある程度の応用が可能で学習者に有益なのは、文型や活用形、文章構造の使用実態ではないかと思われる。これまでに、大学における専門日本語教育の基礎的研究として、学術論文で用いられる文型や文体、文末表現の分析が行われてきている(佐藤・他(1997)、杉田(1997)、村岡(2001)、畠田谷(2003)、村田(2003、2004))。

しかしながら、録音資料を用いての発話の分析は少なく、また外国人労働者の周囲で使

用される日本語を対象とした調査はほとんど行われてない。そこで、ケーススタディとして、外国人労働者の多い工場（製造業）において、日本語母語話者が動詞、特に日本語教育において初級で導入される活用形に注目して、使用の実態を調査した。

2. 調査の概要

2. 1. 調査方法

池田（1996）同様、実際の会話を録音し文字化することによって、製造業の現場における実際の日本語使用状況を調査する。外国人作業員のいる製造組立ラインの日本語母語話者ラインリーダー（以下リーダー）12人に普段の就業状態のまま、携帯録音機を持ち歩いてもらうことを依頼し、各リーダー1時間程度の作業中の発話を録音した（60分テープ使用）。リーダーが作業員に話しかけるのは、作業指導、不良品発生時が多いため、機種変更などによって、作業指導が集中する月初めに録音を依頼した。

本調査は、(1)録音資料をJCHAT形式^①で文字化し、「WAKACHI98—分ち書きガイドライン（大嶋・他（1998））」に従って語に分割する。(2)「CHILDES MANUAL FOR JAPANESE（大嶋・他（1998））」に従い、文字化資料に品詞と形態素のコードを付ける。(3)リーダーが作業員と話している部分だけを抽出する。(4)言語分析ソフトCLAN^②のfreq機能^③で形態素コード「POL」「POT」「COND」「PAS」「CAUS」「INT」をキーワードに、マス形、可能形、条件形、受身形、使役形、意向形を抽出し、使用頻度を算出する、の手順で分析資料を作成した。

2. 2. 被験者について

被験者は、静岡県内の輸送機器製造企業に勤務するリーダー12人である（表1）。全員男性で、勤務歴は2年から13年である。英語、その他の外国語の能力は極めて低い。リーダーの業務は、作業員への作業指導、作業補助（準備を含む）、安全確保、品質チェック、不良品修正など多岐に渡る。この工場は流れ作業による組み立てが中心であり、日本人作業員に混じって外国人研修生や日系ブラジル人・ペルー人が日常的に組み立てラインで作業に従事している。

〈表1〉被験者について

被験者	勤務年数	ライン
A	5	エンジン組立
B	7	車体組立
C	4	車体組立
D	2	エンジン組立
E	5	エンジン組立
F	4	車体組立

被験者	勤務年数	ライン
G	13	エンジン組立
H	6	車体組立
J	10	車体組立
K	8	車体組立
L	4	車体組立
M	6	エンジン組立

3. 結果と考察

3. 1. 動詞の使用

〈表2〉は、リーダーの自立語の使用を一覧にしたものである。自立語全体を見ると、動詞は異なり語数においても、延べ語数においても、名詞に次いで使用が多かったことが分かる。

〈表2〉リーダーの発話における自立語数

	異なり語数	延べ語数
名詞	523	1370
動詞	131	1143
形容詞	82	301
副詞	65	322
数字	79	195
指示詞	60	725
接続詞	25	126
感動詞、間投詞	42	783
オノマトペ	28	29

3. 2. 動詞の活用形

同じ品詞であっても、状況や場によって使用される語は異なる。名詞と動詞が多用されたのは、今回調査した環境に特有の現象である可能性が否定できない。しかし、ライン職場であれば、「指示する」「確認する」など機能面で共通する点があると考えられる。このような機能を表すためには、活用、または活用させた動詞に助動詞などを付加する必要がある。そこで、動詞がどのような形で使用されているかを調べた。

〈表3〉を見ると、テ形の使用が突出していることは一目瞭然である。次に辞書形、ナイ形、タ形の順に多く出現している。単純に考えれば、高頻度で出現したテ形、辞書形、ナイ形、タ形を学習することによって、8割以上の動詞を含む文を扱うことができるということになる。

〈表3〉リーダーの発話における動詞の活用形

	回 数	割合(%)		回 数	割合(%)
テ形	456	40.8	バ形	25	2.2
辞書形	300	26.2	タラ形	24	2.1
ナイ形	117	10.2	意向形	10	0.9
タ形	112	9.8	命令形	6	0.5
マス形	49	4.3	受け身形	6	0.5
可能形	27	2.4	使役形	1	0.1

3. 3. マス形の使用

マス形の使用は少なく、49回使用された。非過去肯定の形での使用が最も多く、全体の3/4を占めている。作業指導の場면을録音したため、現在の状態の説明や、現時点以降の説明が主となり、非過去が多く用いられたと推測できる。

〈表4〉マス形の使用

使用された形	回数	内 訳	回数
非過去肯定	36	Vます	27
		Vています	4
		Vえられます (可能)	1
		Vてみます	1
		Vてもらいます	1
		Vておきます	1
		Vられます (受身)	1
過去肯定	7	Vました	7
非過去否定	4	Vません	1
		Vえられません	2
		Vてもらえませんか	1
意向	1	Vましょう	1
条件	1	Vましたら	1

発話相手を見ると、上司（例文〈1〉）や先輩、違う部署の人に当たる人への発話（例文〈2〉）、または外国人作業者への発話（例文〈3〉）でマス形が使われていた。職場において、目上の人や他部署の人に対して言葉遣いを変えるのは、至極当然のことであろう。一方で、外国人作業者に対して、作業指導をする立場のリーダーが丁寧な表現を用いるのは、一見奇妙である。調査対象とした工場は、日本語能力が十分でない外国人作業者が多い。それまでの経験から、マス形のほうが理解しやすいことが分かり、以来、フォリナートークの一種として使っているのではないかと思われる。

〈1〉 あ、ちょっと呼んでみます。

〈2〉 ○○さん、またあとでいいもんで、アジャストのxxx、見てもらえませんか？（別部署の人に対して）

〈3〉 これ、こうクリップを付けてもらいます。

また、リーダーは、マイクを通じてライン職場全体へのアナウンスも行っているが、その発話内では、ほとんどマス形が使われている。全体の3割がアナウンスでの使用である（16/49回、例文〈4〉）。興味深いことに、マイクを通しての発話では、従属節内でもマス形が使われていた（4回）。従属節は、すべて理由の助詞「ので」の前で使われていた（例文〈5〉）。

〈4〉 えー、クリーナーのビニールのかみこみが、えー、多発しています。

〈5〉 修正のほうが終わりましたので、今からラインを稼動します。

このように見ると、対話でのマス形の使用は、29回と非常に少なくなる。そこで、動詞を含む対面発話のなかから、マス形以外の動詞の丁寧表現を調べてみたところ、動詞の普通形に「んです」を付加した表現が使われていることが分かった（例文〈6〉〈7〉）。今回の資料では、14回観察された。

〈6〉 見てるときは、ちゃんと流れるんですよ。

〈7〉 いや、俺、そのままでやったん（で）すよ。

とはいえ、マス形と合計しても43回に過ぎず、丁寧表現の使用は少ないと言える。工場という職場内で指導的立場にあるリーダーが作業指導する時には、ほとんどが同じ部署の部下、または同僚になるため、丁寧に発話する必要がなかったのかもしれない。

3. 4. 可能形の使用

可能形の使用は、リーダー12名を合計しても27回であり、微々たるものである。そのうちの2/3が「Vえる」の形である。また、27回のうちの15回は「する」の可能形「できる」とその変化形であった（例文〈8〉）。

〈表5〉可能形の使用

使用された形	回 数
Vえる	18
Vえない	3
Vえます	1
Vえません	3
Vえれば	2

〈8〉 Vだけナットランナーでできる？

3. 5. その他の形の使用

タラ形は24回、バ形とその変化形（拗音化）は25回だった。どちらも条件節を形成する形である。今回の資料では、従属節を含む発話は全体の1割程度（163 / 1,570 発話）であること、接続助詞は理由を表すものが多い（袴田（2006））。しかし、〈表6〉を見ると、条件も1/4であり、かなり多いことが分かる。つまり、複文の多くは、「理由／原因＋結果／現状」の関係、または「条件＋結果」の関係（例文〈10〉〈11〉）である。

〈表6〉タラ形・バ形の使用

	使用された形	回数
タラ形	Vたら	24
バ形	Vば	14
	Vりゃ	7
	Vにゃ	2
	Vきゃ	2
受身	V(ら)れて	5
	V(ら)れます	1
使役	V(さ)せて	1
意向形	V(よ)う	10

〈9〉もしなんかあったら、早めにブザーで呼んでください。

〈10〉次、またこう来たら、今度これ。

〈11〉もう一回さ、これ、穴合わせといて、左、左のスイッチを押しばなしにすれば、ズーっと緩んでくるだよ、これ。

〈12〉また同じようにやればいい。

〈13〉どのぐらいでやるか見てれば…。

〈9〉のように、後件に指示、依頼の表現があるものは、タラ形のみで用いられた（7回）。また、〈12〉のように、「いい」を意味する後件の発話（他に「問題ない」「大丈夫」など）は、バ形の半数以上を占める。〈13〉のように、後件を伴わない発話は、タラ形で5回、バ形で6回観察された。

ヴォイス表現の使用は、ほんの7回に過ぎなかった。それもテ形に変化させての使用がほとんどである。作業指導という場面では、話し手が聞き手（または自分自身）のする動作を説明するのが主である。よって、能動文での発話がほとんどであったと思われる。

意向形は10回に過ぎず、単文文末での使用が6回、句内での使用が4回であった。

4. 日本語教育との関わりと今後の課題

以上をまとめると、以下の5点になる。

- 1) テ形、ナイ形、辞書形、タ形は多く使用されるが、それ以外の活用形の使用は少ない。
- 2) マス形は、非過去での使用がほとんどで、上司や先輩、違う部署の人に当たる人への発話で用いられた。また、アナウンスでは、従属節でもマス形が用いられた。
- 3) 可能形は、「する」の可能形「できる」が大半を占めた。
- 4) 複文において、条件を表すタラ形、バ形はかなり多く使用されている。
- 5) 受身形、使役形、意向形は、ほとんど観察されなかった。

〈表7〉は、マス形、可能形、タラ形、バ形、意向形、受身形、使役形が、初級教科書における、取り扱い課と例文である。

〈表7〉『みんなの日本語1、2』での取り扱い課と例文

	課	例 文
マス形	4	わたしは朝6時に起きます。
可能形	27	わたしは日本語が少し話せます。
タラ形	25	雨が降ったら出かけません。
バ形	35	春になれば、桜が咲きます。
意向形	31	いっしょに飲もう。
受身形	37	子どものとき、よく母にしかったです。
使役形	48	息子をイギリスへ留学させます。 娘にピアノを習わせます。

今回の調査結果と大きく異なるのは、マス形である。日本語教育の教科書においては、マス形を基本形として指導する。よって、導入が最も早い。しかし、今回、調査対象とした工場内では、指導的立場にある日本語母語話者の発話に、マス形が非常に少なかった。つまり、作業員である外国人就労者がマス形を聞く機会は少ないということである。職場全体へのアナウンスではマス形が使われていたため、ある程度、理解する必要はある。

一方で、リーダーがマス形を用いていたのは、上司や他部署の人に対してであった。部下や同僚に対してと、目上や外部の人に対して言葉を使い分け、職場内での人間関係を考慮していることがうかがわれる。言い換えれば、目下からの発話には、丁寧な表現が当然と考える可能性もある。

そこで、リーダーが指導していた相手、リーダー以外の日本人作業員発話を調べてみたところ、〈表8〉のような結果になった。

〈表8〉リーダーとリーダー以外の発話比較

	マ ス 形	辞 書 形	タ 形
リーダー（回）	49	300	112
全体における割合	4.3%	26.2%	9.8%
リーダー以外（回）	19	159	71
全体における割合	3.6%	30.4%	13.6%

ほとんどの対話相手がライン作業員であるため、部下であるはずだが、その丁寧表現を使う割合は、リーダーの発話とそれほど変わらない。指導的な立場にあるリーダーであっても、上司ではなく同僚という意識なのかもしれない。この結果を見ると、職場において日本語を理解する必要がある学習者には、マス形の導入、練習はもっと遅くてもよいように思われる。

また、資料から分かったことは、特定の使用が多いということであった。可能形は「す

る」の可能形「できる」が多く、タラ形は後件に依頼、指示が多かった。バ形の後件は「問題ない」を意味する「いい」「大丈夫」が半数以上を占めていた。可能形にしろ、タラ・バ形にしろ、全体からみると使用数は少ない。そのため、初級日本語では中期以降の導入となっているが、ひとつのかたまりとして早期に導入することも可能だろう。

今回の調査は、非常に限定された環境におけるケーススタディであるため、一般化することはできないが、実際に工場で指導をする立場にある日本語母語話者の発話と、日本語教育の内容が異なっていることが分かった。小林(2005)が述べているように、実際の使用を調査してみると、日本語教育の内容と異なっていることがある。今回の資料でも、「～ます」ではなく「(普通形) んです」が多く観察された。

日本語教育の現場では、学習者が日本語学習についてどのように考えているのか、どのようになりたいのかという学習者側の意識に注意を払う必要がある。また、習得の難易も重要であるが、同時に学習者を取り巻く日本語使用状況にも注目しなければならないのではないだろうか。外国人労働者が日本語学校へ通うことは少なく、彼らにとって日本語学習は *instrumental motivation* による場合がほとんどであろう。

どの文型から導入するかを検討する際の材料として、実際の言語使用を観察する意義は大きい。このような学習者には、シラバス作成にあたり、実際に使われているという観点からの検討を欠いてはならないと思われる。今回は、母語話者の発話を電算化し分析した。今回は不完全なものではあったが、このような母語話者コーパスを用いることによって、目標言語の実態をつかむことができる(大曾 2006)。

竹内(2001)は、公民館における日本語講座の問題点として、学習が長続きしないという点を挙げている。浜松市(1999)も同様の問題を抱えている。このような問題に対する即効薬があるわけではないが、学習者が置かれている日本語使用状況を考慮に入れた学習の機会を提供することによって、ある程度改善されると思われる。

今回は、主に話者であるリーダーの発話のみに注目したが、発話の相手である作業者の発話にも注目して、異同を調査したい。また、工場での作業指導という立場からの日本語母語話者を対象としたことから、日本語使用に特徴があったと思われる。工場以外の環境においても資料を収集し、環境や話者による違いを明らかにしていきたい。

【注】

- (1) 会話相互作用のトランスクリプトをコンピューター・ファイルとして作成するフォーマットシステム。
- (2) Leonid Spector (Carnegie Mellon University) によって作成された言語分析プログラム。頻度計算、文字列検索、共起分析、MLU 計算などが自動分析できる。
- (3) 出現頻度計算を行うプログラム。
- (4) 本稿では、接続助詞のあるものだけを従属節とする。

【参考文献】

池田伸子(1996)「日本人ビジネスマンの話し言葉における語彙調査ービジネスマン用日本語教育システム開発の基礎としてー」『日本語教育』88号、日本語教育学会、pp.117 -

127

- 畠田谷桂子 (2003) 「日・英応用磁気学実験系論文にみる能動文と直接受動文の使用比較－「実験方法」セクションを中心に－」『日本語教育』118号、日本語教育学会、pp.77－85
- 大嶋百合子・B. MacWhinney (1998) 『CHILDES Manual for Japanese』改訂版、白井英俊・宮田 Susanne・中則夫編集、The JCHAT Project
- 大曾美恵子 (2006) 「日本語コーパスと日本語教育」『日本語教育』130号、日本語教育学会、pp. 3－10
- 小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた『～ません』と『～ないです』」『日本語教育』125号、日本語教育学会、pp. 9－17
- 佐藤勢紀子・仁科浩美 (1997) 「工学系学術論文にみる「と考えられる」の機能」『日本語教育』93号、日本語教育学会、pp.61-72
- 杉田くに子 (1997) 「上級日本語教育のための文章構造の分析－社会人文学系研究論文の序論－」『日本語教育』95号、日本語教育学会、pp.49－60
- 竹内比呂也 (2001) 「公民館活動にみる日本人社会とブラジル人社会の接点－浜松市の事例についての考察－」『ブラジル人と国際化する地域社会－居住・教育・医療』明石書店、pp.210－227
- 袴田麻里 (2002) 「職場で使われる日本語－テ形、特に「～ている」に注目して－」『静岡大学留学生センター紀要』第2号、静岡大学留学生センター、pp.45－56
- _____ (2004) 「工場内における日本語使用状況調査－「～て」の使用状況－」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集発表2』日本語教育学会・他、pp.273－278
- _____ (2006) 「日本語母語話者の辞書形、タ形の使用」『静岡大学留学生センター紀要』第5号、静岡大学留学生センター、pp.41－52
- 馬場眞知子 (1998) 「サトウキビ栽培コースの技術研修現場での日本語使用状況とJSPの学習効果について」『日本語教育』99号、日本語教育学会、pp.131－142
- 浜松市地域日本語教育推進委員会 (1999) 『浜松市における日本語教育のあり方に関する報告書』浜松市地域日本語教育推進委員会
- 村岡貴子・他 (1997) 「農学系8学術雑誌における日本語論文の語彙調査－農学系日本語論文の読解および執筆のための日本語語彙指導を目指して－」『日本語教育』95号、日本語教育学会、pp.61－72
- 村岡貴子 (2001) 「農学系日本語論文における「結果および考察」の文体－文末表現と文型の分析から－」『日本語教育』108号、日本語教育学会、pp.89－98
- 村田年 (2003) 「文章と文型5－経済学論文における文型の使用頻度調査－」『日本語と日本語教育』第31号、慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター、pp. 1－28
- _____ (2004) 「論文の大段落と文型－物理学論文の場合－」『日本語と日本語教育』第32号、慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター、pp.19－52
- Ellis, R. (1997) *Second Language Acquisition* : Oxford University Press.

Japanese Verbs in Native Japanese Speech in the Assembly Plants

HAKAMATA, Mari

This paper aims to clarify the usage of verbs in a workplace, manufacturing section. 12 Japanese Line-Leader (JLL)s' speeches in the assembly plants were recorded and analyzed. The results are summarized as follows: 1) TE-form, Dictionary-form, NAI-form, and TA-form are used frequently, but other forms are not used very often. 2) MASU-form are used with the present tense in the speeches to their seniors, and in the announcement. 3) Half numbers of Potential-forms are "DEKIRU". 4) TARA-form and BA-form are used frequently in 複文. 5) Passive-form, Causative-form, and Volitional-form are used very few. It is important to know real Japanese usages when syllabus are examined. Research of real Japanese usages is necessary for Japanese learners who have few time to study.